

治療・リハビリ情報交換

ポスト ポリオ

24日ポリオ友の会・東海発足の集い

高齢社会を生きてる

支え合う

一九五〇年代に大流行したポリオ(小児まひ)にかかった人が、感染から三十四年後に、筋肉の痛みやしびれを訴えている。これは「ポリオ後症候群(ポストポリオ)」と呼ばれる二次後遺症だが、原因が分からず悩む人が少なくない。治療やリハビリの情報を交流しようとする二十四日、名古屋市内で「ポリオ友の会・東海」が発足する。

感染から 30—40年

この会を呼び掛けたのは名古屋市瑞穂区の小児科医横井敦子(とんず)さん。四歳の夏、ポリオにかかり、右足の筋力が弱くなって、小さい時はよく転び速く走れなかった。女学校時代から歩いて足を鍛え、医師になっても住診は歩き、ゴルフ歴も二十五年。



科医に「ポストポリオ」とた。だが、ポリオウクチンが出来るのが特徴だ。診断された。ポリオはウィルス感染症 ほぼ根絶した。で、幼い子どもがかかりや ところが、手足のまひな すい。中枢神経系が侵さ どにめげず機能を回復した 起き、研究の結果、再感染 呼吸不全から死亡した 人が、感染から三十年から ではなく、ウィルスの攻撃 手足のまひなど後遺症 四十年たつて、再び手足の に耐えて生き残り、筋肉の

まともいつてあるという。アメリカでは「ポストポリオ」患者は、ポリオ生存者六十四万人の二〇—四〇%と推定。全国で治療やリハビリなど二百の支援チームができています。

筋肉痛やしびれ…

的確な診断、正しい知識を

動きを支えてきた神経細胞の運動ニューロンが、長年の負担に疲れ、退化したのが原因と、研究者の合意が

「ポリオの人が悩みを分かち合う場をつくりたい」と呼びかける横井敦子医師(名古屋市長瀬区玉水町2の横井医院で)

自らもポリオを経験した神経内科の川西健登医師(大阪)は「ポストポリオの的確な診断とともに、正しい知識を広めたい」と力説。一人ひとりの症状に応じて、筋肉の使い過ぎを防ぎ、筋力を保つリハビリを続け、装具も工夫する。過

は九五年に「ポリオの女性の会(神戸)が発足、東京、北海道などに広がり東海は六番目。ポストポリオについて学び、治療やリハビリ、靴、つえ、装具の情報交換もしていへ。

「ポリオ友の会・東海」への連絡は、名古屋市長瀬区玉水町2ノ72、横井医院 〓(052)(831)5014。

体験者の女医さん呼び掛け

め、座骨神経痛に襲われ、血液循環が悪く、しびれ、が残ることがある。脊椎(せきつい)の間狭搾症(かんせつさくしやう)と診断された。患っていない左足の筋力も低下して、戸惑うばかり。後に神経内

筋力低下、関節の痛み、しびれ、冷え、筋萎縮などを訴えるケースが出ている。流行で約三万五千人が感染、約七千五百人が死亡し患っていない手足にも、症